

教育力を高めるための学校・家庭・地域の連携  
－保護者・地域の思いや願いを生かした教育の推進－

I はじめに

急激な社会の変化，とりわけ核家族化や生活スタイルの多様化，希薄な人間関係が増加している社会状況等に伴って，家族や地域社会の教育力が弱まり，学校教育への比重が高まりつつある。

このような状況の中，校長は，家庭や地域の教育力を学校の教育力にうまく繋げていくには何をどのようにすべきかを考え，学校・家庭・地域三者それぞれが得意とする教育力を引き出す工夫をし，子どもたちの健やかな成長のために，主体的に関わっていく必要がある。すなわち，家庭や地域の特性やそれぞれが有している教育力を知り，それぞれの思いや願いなどを真摯に受け止め，適切に学校経営に生かしていくことが重要である。

本研究部会では，三者の相互連携を図りながら，「保護者・地域住民の思いや願いを生かした教育」を推進するための方策等について，校長の学校経営の立場から事例を通して研究協議を深めてきた。

II 研究の概要

1 保護者・地域の思いや願いを生かした教育について

子どもたちの健全な育成を願うのは社会全体の願いである。特に学校が主体となって，家庭や地域の連携・協力を求め，子どもたちに「生きる力」を身に付けさせたいと考えている。つまり，しっかりとした目標と信念を持ち，多様な人間関係の中で自分の可能性に向かって努力し，自己実現を図ることができる子どもを育てることである。甲州市では，このような考えのもと，平成23年9月に「確かな学力育成プロジェクト」を立ち上げた。これは，市内の小学校13校及び中学校5校が同じ方向性を持ち，家庭・地域と連携する中で，子どもたちの「確かな人間性」「健康や体力」を育もうと，校長会がリーダーシップをとり立ち上げたプロジェクトである。地域・家庭・学校から出された課題をもとに，①授業づくり・授業改善，②学級づくり・集団づくり，③保護者・地域住民との連携，の3つに視点をあて具体的な取組を進めている。

本研究においても，このプロジェクト設立の経緯や目的から「保護者・地域住民の思いや願い」をくみ取り，それを生かす教育活動，すなわちプロジェクトの具体的な取組と結びつけて実践的な研究を進めることとした。

2 研究の焦点化（研究内容）について

甲州市全体で取組を進めている「あいさつ運動」について，「日本一あいさつができる甲州市の子ども」を目指して，校長は，その取組を学校経営にどのように位置づけ実践を進めたのか，また，保護者や地域住民とどのように連携し実践を広めたのかについて，事例を通して研究協議を深めた。

特に，「あいさつ」を研究の柱にした理由は次の通りである。

- (1) 真にあいさつが身につけば，コミュニケーション能力や社会性の伸張につながると考えた。あいさつは，多様な人間関係を構築する第一歩である。
- (2) 地域の方々とあいさつができることは，自分がその地域の一員であることを意識するとともに，地域でしっかり活動していく基盤となる。
- (3) 甲州市全体であいさつ運動に取り組むことや市P連の活動重点に取り上げられたことから，地域住民や保護者の思いや願いを受け止め，それを生かした教育活動につながると考えた。

3 取組実践事例をもとに討議されたこと

「あいさつ運動」について、8校の実践事例を発表し合い、それをもとに討議を進めた。

- (1) あいさつに対する意識は高まっているが、「形式的な受け止めに終わっている」「自分から進んで」「あいさつの意義がわかっている」「場面に応じて」「地域でも」という点が課題である。
- (2) 地域を巻き込んだ取組が必要→各校の特色ある取組はいいのだが、学校独自の取組だけでは限界もある。市全体で取り組んでいるという意識がまだ低いのではないだろうか。大人にも子どもにも、その意義の理解と意識づくりが必要。特に、大人の意識の高まりを広げたい。
- (3) そのためには学校間の連携、市の広報やCATV「街の話題」等を活用して運動の広がりをつくる、という方法が考えられる。
- (4) 地域の人も子どもたちに不用意に声かけができない、という社会的な事情が「あいさつ運動」の広がりを遅らせてはいないか。→地域の大人と子どもたちの日常的なふれあいの機会をつくる必要がある。
- (5) 各校の取組の中で、マンネリ化をいかに防いでいくか知恵を出し合うことが必要である。あいさつ運動の継続性と広がりをどう工夫していくか考えていく。
- (6) 様々な場面に応じたあいさつの仕方やあいさつの意義を教えることや、子どもたちが体験を話し合ったり、意見・感想を述べ合ったりする授業を仕組んでいく必要がある。道徳や特別活動等の時間の授業を工夫する。
- (7) 地域全体へ呼びかけしたりして、地域の大人がもっとあいさつ運動に関心を持ち、積極的に子どもたちへ言葉かけをしていく雰囲気をつくる必要がある。

#### 4 あいさつ運動の深まりや継続性、そして地域への広がりを意識した実践例

- (1) 甲州市の広報「こうしゅう」への取組（本研究会の働きかけ）
- (2) 学区の全戸に「あいさつ運動」推進のパンフレットを配布した取組
- (3) あいさつ運動の実践テーマを横断幕にして掲げた取組
- (4) 親子で標語を作成し、校舎内外に掲示する取組
- (5) 道徳の授業感想をもとに「学校だより」を使って家庭での意識を高めようとした取組

### III まとめと課題

#### 1 指導・助言

- ・ あいさつ運動は、ただ推進するのではなく、校長会の取組として、コミュニケーション能力を伸ばす、社会性を伸ばす、円滑な人間関係の構築など、目的をしっかりと確認して取り組んで欲しい。
- ・ あいさつ運動のマンネリ化を防ぐ方法として、①集中的に行う、活動に変化を持たせる、②あいさつするといいいことがある、声を出すと気持ちいい、あいさつが気持ちいいなど、実感として子どもが感じられるような指導をする 等を実践するといいい。
- ・ PDCAサイクルで取り組む必要がある。何を、どのレベルまでという目安をつくって実践していくことが大事である。
- ・ 学校経営や学校改善に保護者や地域住民の声を生かしていこうという意志・行動が大切である。

#### 2 成果と課題

- ・ 様々な取組の報告・討議から、各校の実践の広がりや深まりに役立てることができた。
- ・ 学校からの発信力が大切であり、今後もマンネリ化しないよう、様々な工夫を図りながら、実践を展開する必要がある。
- ・ 子どもたちが、「あいさつ」について形式的な受け止め方に終わらないよう、その意義や意味が身に付けられる取組を継続、深化させていくことが大切である。

(三神 寿男)